

平成 19 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 19 年 7 月 25 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ <http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo>

目次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 普通作物

イネでは、いもち病（穂いもち）の発生量はやや少、紋枯病は平年並、白葉枯病は少と予想されます。斑点米カメムシ、トビイロウンカは平年並、ツマグロヨコバイはやや多と予想されますが、防除が必要となるほどではありません。イネクロカメムシはやや多で注意が必要です。セジロウンカは県南部で多と予想され、圃場によっては防除が必要になる可能性があります。その他の地域では平年並の予想です。

大豆では、紫斑病、コガネムシは少、ハスモンヨトウは平年並と予想されます。吸実性カメムシはやや多と予想されますので、発生に注意してください。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病（中晩柑類）、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。ミカンハダニの発生量はやや少と予想されます。かいよう病（温州みかん）の発生量は少と予想されます。

果樹カメムシ類の果樹園への飛来数は少と予想されますが、局所的に集中して飛来することがありますので注意してください。

3) 茶

炭疽病、カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。チャノコカクモンハマキ第 3 世代幼虫の発生時期、発生量とも平年並と予想されます。チャノミドリヒメヨコバイの発生量はやや多と予想されますので、発生に注意して防除を計画してください。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量はやや少と予想されます。

5) 花卉

ツツジ類では、褐斑病の発生量はやや少、ツツジグンバイの発生量は少と予想されます。

2. 作物別の状況

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
			発生時期	発生量		要防除圃場率	7月	8月			
							7月	8月	8月		8月
発生時期	発生量	要防除圃場率	下旬	上旬	中旬	下旬					
イネ	穂いもち	—	やや少	中	普通	出穂 ↓	発病密度			1) 7月13～14日、22日に県全域でまとまった降雨があり、葉いもちが蔓延する恐れがあります。 2) 葉いもちが発生し、梅雨明けまでに出穂した圃場では穂いもちに特に注意してください。 3) 圃場を見廻り、必要なら早急に治療または予防の薬剤散布を行ってください。	
	紋枯病	—	平年並	中	普通	出穂 ↓	発病密度			1) 毎年発生が多い圃場では特に注意してください。 2) 薬剤は株元を中心に散布してください。	
	白葉枯病	—	少	小	低		発病密度			1) 毎年発生が多い圃場では注意してください。	
	斑点米カメムシ類	—	平年並	中	普通	アカヒゲホソミドリカスミカメ	アカスジカスミカメ	ホソハリカメムシ・クモヘリカメムシ		1) 周囲より出穂の早い圃場では被害が集中します。 2) 周辺にイネ科雑草が多い圃場では、特に注意が必要です。 3) 出穂直後は特に被害が集中しますが、その後も中・大型種による加害が続きます。	
	イネクロカメムシ	—	やや多	中	普通	被害量	誘殺密度		1) 発生圃場では、これから次第に被害が大きくなります。 2) イネの株元から吸汁するため、稔実が悪くなります。 3) 日中は株元に潜んでいるので、薬剤は株元までしっかりとかかるようにします。		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
							下旬	上旬	中旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	—	やや多	大	低	成虫密度				1) 9月上旬頃までに収穫の終わる圃場では、実害はほとんど見られません。
	セジロウンカ	—	(県南部)多 (その他)平年並	中 小	低 低	成虫密度				1) 特に南部の地域（紀州、志摩）で局地的な被害の出る恐れがあります。
	トビイロウンカ	—	平年並	小	低	成虫密度				1) セジロウンカの発生した地域では作型の遅い圃場においてトビイロウンカの被害も発生する恐れがあります。
ダイズ	紫斑病	—	少	小	低	発病密度				1) 自家採種などで紫斑病発生の恐れがあるときは防除が必要です。 2) 薬剤散布は開花後の若莢期に行います。
	コガネムシ類	—	少	小	低	成虫密度				1) 薬剤防除は一斉防除が効果的です。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
			発生量	程度		7月	8月			
						7月	8月	8月	8月	
平年比	平年比	平年比	下旬	中旬	下旬					
ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平年並	小	普通			被害量		<ul style="list-style-type: none"> 1) 白変葉を手がかりに早期発見に努め、若令幼虫期に防除します。 2) 幼虫は葉裏にいることが多く薬剤は葉裏にもかかるよう丁寧に散布します。
	吸実性カメムシ類	—	やや多	中	普通		開花	成虫密度		<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布は一斉防除が効果的です。 2) 開花終期から莢伸長期までに防除します。 3) 本県では、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、クサギカメムシ、ブチヒゲカメムシ、ホソヘリカメムシ等がよく見られます。
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的実施し、8月下旬まで感染防止に努めます。 2) 梅雨明けと共に感染源となる枯れ枝が増加するので、切除に努めます。
	かいよう病	—	(温州)少 (中晩柑)平年並	小 小	低 普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 現段階で果実・夏枝に病斑が見られる園では、発病果が急増します。発病した枝・葉・果実を除去し、早急に防除を行います。 2) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底します。 3) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除します。
	ミカンハダニ	—	やや少	中	普通	雌ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 2) 1葉当たりの雌成虫寄生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除します。 3) 防除が必要な場合は、同一系統の薬剤の連用を避けます。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
			発生量	程度		7月	8月			
						7月	8月	8月	8月	
平年比	平年比	平年比	下旬	中旬	下旬					
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 寄生果率 10%になった時を防除の目安にしてください。 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。 イヌマキ、サンゴジュ等の防風垣に隣接した樹で、被害が多くなる傾向があります。
果樹共通	カメムシ類	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 飛来が見られない園では、防除の必要はありません。 現在は山林で世代交代していると思われます。 樹園地（特にカキ）には局所的に飛来してくることがあるので、園地巡回をしてください。 ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害され、被害を受けることがあるので注意が必要です。
チャ	炭疽病	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 三番茶芽の開葉初期に防除します。 降雨時に新葉の展開していた園では感染している可能性が高いので、治療効果の高い薬剤で防除します。 2日間降雨が続いた場合は、感染の可能性が高くなります。 三番茶芽に感染すると翌年の伝染源にもなるので注意が必要です。
	カンザワハダニ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 防除が必要な場合、薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、同一系統の薬剤の連用は避けます。
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 三番茶芽の開葉初期に防除します。 三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
			発生時期	発生量		要防除圃場率	7月	8月			
							7月	8月	8月		8月
発生時期	発生量	発生時期	発生量	発生時期	発生量	発生時期	発生量	発生時期	発生量		
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					1) 三番茶芽の萌芽期から開葉初期にかけての加害を防ぐことが大切です。	
	チャノココクモンハマキ	平年並	平年並	小	普通					1) 第3世代幼虫の防除時期は、孵化直後～2齢幼虫期までで、第2世代成虫発生（左図）のピークの1週間後が防除適期です。	
イチゴ	炭疽病	—	やや少	小	普通					1) 高温期には定期的に防除をしてください。 2) 灌水は、水滴が極力茎葉に当たらないように行います（やさしく手灌水、チューブ灌水）。 3) 薬剤散布は、株元まで十分かかるようにし、畝やベンチの両側からも散布します。	
ツツジ類	褐斑病	—	やや少	小	普通					1) 伝播は雨とともに飛散したり、ツツジグンバイなどの害虫の体に付着したりして行われます。 2) 防除は隅々までかかるよう丁寧に散布してください。	
	ツツジグンバイ	—	少	小	低					1) 風通しが悪く高温乾燥条件が続けば盛んに繁殖するので注意してください。 2) 成虫・幼虫も葉の裏面に生息しているので、葉の裏面に薬剤がかかるよう丁寧に散布してください。	

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は、平年より気温は高くなく、曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、葉いもちの発病圃場率は18.2%(平年54.3%)、上位葉進展株率は0.1%(5年平均5.4%)と少 (-)</p> <p>3) プラストムでは、感染好適日が7月13日~14日、22日にほぼ県全域で出現 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、葉いもちの発生は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 感染源となる葉いもちがや少ないことを考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	紋枯病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は、平年より気温は高くなく(-)、曇りや雨の日が多い(+)予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発病圃場率は9.1%(平年12.6%)でやや少、発病株率は1.9%(平年14.9%)で少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>4) 農業研究部作物研究課の圃場では、水稻の茎数はやや多 (+)</p> <p>考察: 今後の発病を妨げる要因が特にないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	白葉枯病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 台風4号の風雨による感染の可能性 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発病圃場率は0%(平年1.2%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場での発生は無~平年並(概して無) (-)</p> <p>考察: 台風4号の風雨による感染はそれほど多くないと思われ、予想発生量は少と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 7月第2週の巡回調査のすくいとりで、発生箇所率は23.0%(平年31.0%)と少、畦畔における平均虫数は7.5頭(平年5.7頭)と多 (±)</p> <p>2) 一般圃場では、発生は少~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 目立った増減の要因がないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(畑・松阪市)では、7月第2半旬までの虫数は289頭(平年135頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率は4.5%(平年2.9%)と多、25株当平均虫数は5.0頭(5年平均6.1頭)と平年並 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は無~多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 巡回調査の結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	ツマグロヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(7月第2週)では、払い落とし法による発生圃場率は43.5%(平年31.5%)と多、平均成虫数は3.4頭(平年4.1頭)と少、平均幼虫数は19.1頭(平年9.2頭)と多(+)</p> <p>2) 一般圃場での発生は、少~やや多(概して平年並)でした。(±)</p> <p>考察: 発生圃場率が高いことを重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	(県南部) 多 (その他) 平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(7月第2半句まで)では、誘殺数が県南部の御浜町で9頭(平年38.2頭)、紀北町で2頭(平年52.8頭)、伊賀市で7頭(平年0.7頭)、松阪市(水田)で0頭(平年8.7)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、県南部の紀州、志摩地区では発生圃場率・虫数はそれぞれ60%・7.3頭、41.7%・5.0頭と多(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、県内全体の発生圃場率は12.2%(平年18.4%)とやや少、平均虫数は4.4頭(平年4.7頭)と平年並(±)</p> <p>4) 九州各県では、7月上旬に飛来の兆候(+)</p> <p>5) リアルタイムウンカ飛来予測(NARC等調査)では、7月2~5日、7日、11日、15日に本県へのウンカ類の飛来を予測(+)</p> <p>6) 一般圃場では、発生は無~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 7月上旬における局地的な多飛来の可能性を考慮して、県南部の予想発生量はやや多、その他地域は平年並と考えます。</p>
	トビイロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(7月第2半句まで)では、誘殺数は、松阪市で0頭(平年0.3頭)、御浜町で0頭(平年1.2頭)、紀北町で0頭(平年0頭)、伊賀市で0頭(平年0.1頭)と平年並(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率は0%(平年0.1%)、平均虫数は0頭(平年0.7頭)と平年並(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は無~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>4) リアルタイムウンカ飛来予測(NARC等調査)では、7月2~5日、7日、11日、15日に本県へのウンカ類の飛来を予測(+)</p> <p>5) 九州各県では、7月上旬に飛来の兆候(+)</p> <p>考察: 特に多飛来の兆候もないので、予想発生量は平年並と考えられます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 去年の発生は少 (-)</p> <p>2) 一般圃場(四日市・鈴鹿)では、発生は無 (-)</p> <p>考察: 特に増加する要因も見られないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	コガネムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(畑・松阪市:7月1~10日)では、誘殺数はドウガネブイブイ 207頭(平年 343頭)、ヒメコガネ 52頭(平年 143頭)と少 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(松阪市:6月~7月中旬)では、誘殺数はマメコガネ 202頭(平年 325頭)、ヒメコガネ 16頭(平年 68頭)、ドウガネブイブイ 19頭(平年 59.9頭)と平年より少 (-)</p> <p>3) 一般圃場(四日市・鈴鹿)では、発生は無 (-)</p> <p>考察: フェロモントラップの結果を重視して、予想発生量は少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(松阪市:7月第3半句まで)では、誘殺数は 287頭(平年 285頭)と平年並(±)</p> <p>考察: 特に増減する要因も見られないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(畑・松阪市:7月第1半句~第2半句)では、誘殺数はイチモンジカメムシ 3頭(平年 7.3頭)と少、クサギカメムシ 0頭(平年 15頭)と少、アオクサカメムシ 141頭(平年 7.2頭)と多 (+)</p> <p>考察: 現状はやや多と思われますが、今後特に増加する要因もないので、予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年より曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、果実における発病度 40.7(平年 22.0)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、果実発病度は 1.8(平年 0.2)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 一般圃場の発生量と気象要因を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	(温州) 少 (中晩柑) 平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年より曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(新甘夏、7月中旬)では、発病果率18.3%(平年35.0%)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、春葉では中晩柑類で発病葉率0.23%(±)、果実では中晩柑類、温州とも発病未確認(平年発病果率0.2%)(-) (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 気象条件を勘案して、予想発生量は温州みかんで少、中晩柑類で平年並と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は、平年より気温は高くなく(+)、曇りや雨の日が多い予想(-) (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当寄生虫数は、無防除区で0頭(平年19.0頭)、防除区で0頭(平年3.3頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均寄生葉率は3.8%(平年10.4%)、1葉当平均寄生虫数は0.10頭(平年0.40頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年より曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、粘着トラップへの誘殺は6.33頭(平年2.57)とやや多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果は未確認(平年1.5%) (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~やや多(概して平年並)で、県南部で多い傾向 (±)</p> <p>考察: 一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町カンキツ園地内:7月1日~10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 1,890 頭(平年 352 頭)と多、ツヤアオカメムシ 4 頭(平年 8 頭)と平年並 (+)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:4月1日~7月15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 92 頭(平年 619 頭)と少、ツヤアオカメムシ 85 頭(平年 132 頭)とやや少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(4月1日~7月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で 850 頭(平年 1,551 頭)、中間地(津市白山町二本木)で 1,031 頭(平年 1,816 頭)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 21 頭(平年 482 頭)とやや少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、果樹園地への飛来は未確認(ナシ、カキ園たたき落とし数平年値 0.0 頭)(±)</p> <p>5) 一般圃場では、園地への飛来数は少 (-)</p> <p>考察: 中北部における発生量は少なく、県南部においてもカンキツ園への飛来は当面増加するとは考えにくいので、予想発生量は少と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年より曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月下旬)では、2 番茶での発生は未確認(平年 3.1 枚/m²) (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、1 m²当たり発病葉数 1.2(平年 2.7)とやや少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月20日発表)によると、前半は、平年より気温は高くなく(+)、曇りや雨の日が多い予想(-)(±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率は 0%(平年 5.0%)、1 葉当寄生虫数は 0 頭(平年 0.17 頭)で少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均寄生葉率は 0.4%(平年 2.3%)、平均寄生虫数は 0.01 頭(平年 0.05 頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察: 一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(4月第1半旬~7月第3半旬)では、誘殺数は 22 頭(平年 47 頭)とやや少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均寄生虫数は 3.1 頭(平年 2.3 頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多)(+)</p> <p>考察: 一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年に比べて曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(4月第1半旬~7月第3半旬)では、誘殺数は12,520頭(平年13,870頭)と平年並(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、平均寄生虫数は18.6頭(平年28.0頭)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノココクモンハマキ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップでは、発生消長は平年とほぼ同調しており、第2世代の終息時期は平年並(±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(4月第1半旬~7月第3半旬)では、誘殺数は828頭(平年826頭)と平年並(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、1㎡当巻葉数は0(平年0.6)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察: フェロモントラップでの誘殺状況から第3世代幼虫の予想発生時期は平年並、一般圃場の発生状況を重視して予想発生量は平年並と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は、平年より気温は高くなく(±)、平年と比べ曇りや雨の日が多い(+)予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発病株率0%(平年0.2%)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少~平年並(概してやや少)(-)</p> <p>考察: 急増する要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
ツツジ類	褐斑病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月20日発表)によると、前半は平年より曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、新梢発病葉率0%(平年0.2%)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 今後の増加を勘案しても、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツツジゲンバイ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(7月第2週)では、ヒラドツツジにおける成虫0.1頭・幼虫0頭(平年値:成虫1.8頭・幼虫0.6頭)、サツキにおける成虫0頭、幼虫0頭(平年値:成虫1.2頭・幼虫0.6頭)と少(-)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 特に大きな増加要因がないので、予想発生量は少と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていれればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「イネ紋枯病菌について」

1) 多犯性の糸状菌（カビ）です

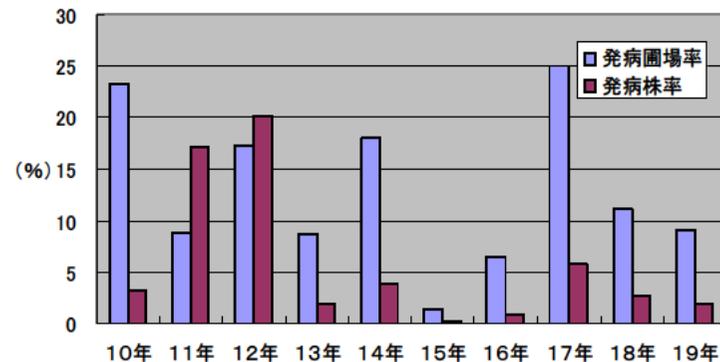
Thanatephorus cucumeris(Frank)Donk という名前の病原菌で、よく知られているイネ紋枯病のほか、トウモロコシ、ダイズ、トマト、ナスにも病気を引き起こします。土中に数年間残ることがあります。

2) イネ紋枯病

水稻ではいもち病に並ぶ有名な病害ですが（右写真）、多少の発生では減収しません。



年によって発生状況は大きく異なりますが、下のグラフをよく見ると徐々に減り、また増えるという周期が見られます。菌核と呼ばれる伝染源が土中に残って翌年の発生量に影響するためでしょう。高温多湿条件で多発しますが、真夏日が続くとかえって暑すぎて抑制されることもあります。降雨が少ない夏には広がらないようです。本年の発生は今のところそれほど多くありません。



三重県におけるイネ紋枯病の発生推移 (7月)

”みえのえみ”はやや弱い品種ですが（下表）、分けつが多いとどの品種でも発生しやすくなります。

品種	コシヒカリ	キヌヒカリ	みえのえみ	みえのゆめ	あきたこまち
抵抗性	中	中	やや弱	中	中

耕種的防除法として、代かき時のゴミを水田から除くとゴミに混ざっている菌核を減らすことができます。強風でゴミが水田の端に吹き寄せられているときにチャンスです。

3) ダイズ葉腐病

イネ紋枯病菌がダイズに感染するとダイズの葉腐病を引き起こします。

主に葉に発生し、葉腐れ症状となります。収穫時にも色づかず、青立ち（写真右）になります。全国的に発生はほとんど見られませんが、2, 3年前から他県で水田跡のダイズにこの病気が発生し問題になっています。生態はよくわかっていませんが、イネ紋枯病が多発した水田跡のダイズ作で発生が多いようです。土中の菌核が感染源となり、高温多雨だと発病を助長します。三重県でも水田輪作ダイズでは感染の恐れがあるので注意が必要です。



(写真は近畿中国四国農業研究センター提供による)

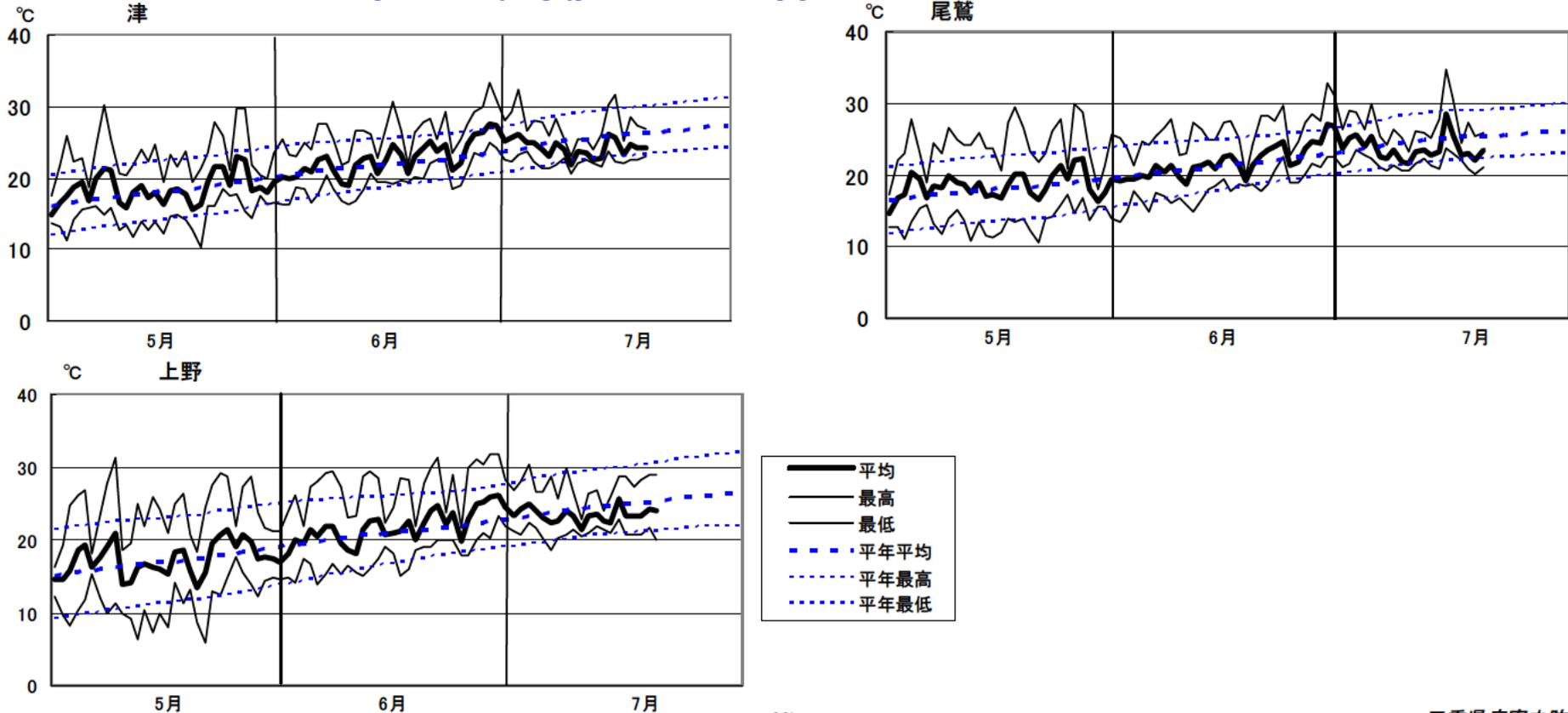
6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 19 年 7 月 20 日 名古屋地方気象台発表)

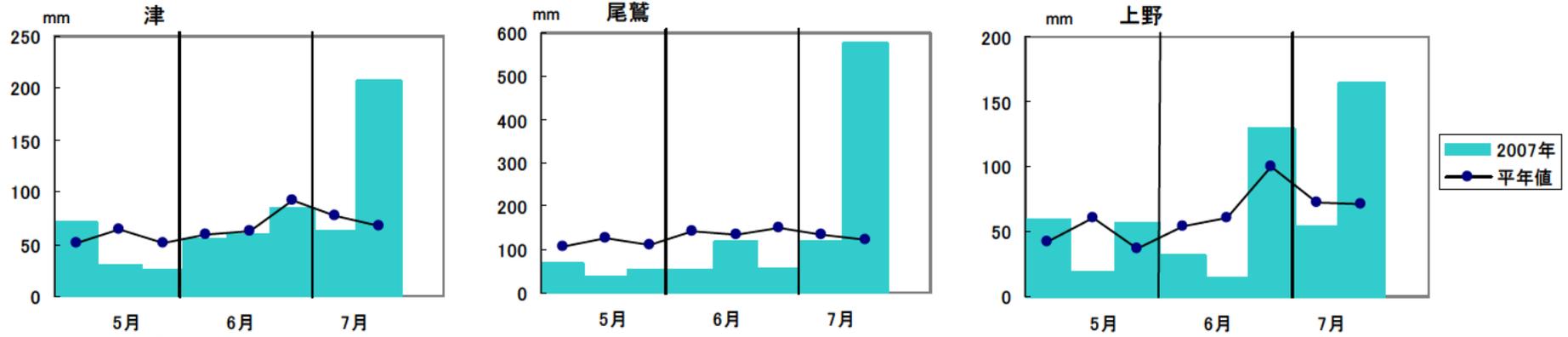
東海地方の向こう 1 か月は、期間の前半を中心に気圧の谷や梅雨前線の影響で平年と比べ曇りや雨の日が多いでしょう。後半は高気圧に覆われて平年と同様に晴れる日が多いでしょう。

1 週目 (7 月 21 日～27 日)	気圧の谷や梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多いですが、期間の中頃は晴れる所もあるでしょう。	晴れ日数の平年値 約 4 日
2 週目 (7 月 28 日～8 月 3 日)	気圧の谷や湿った空気の影響により、平年と比べ曇りや雨の日が多いでしょう。	同 約 5 日
3～4 週目 (8 月 4 日～17 日)	湿った空気の影響を受ける日もありますが、高気圧に覆われて平年と同様に晴れる日が多いでしょう。	同 約 9 日

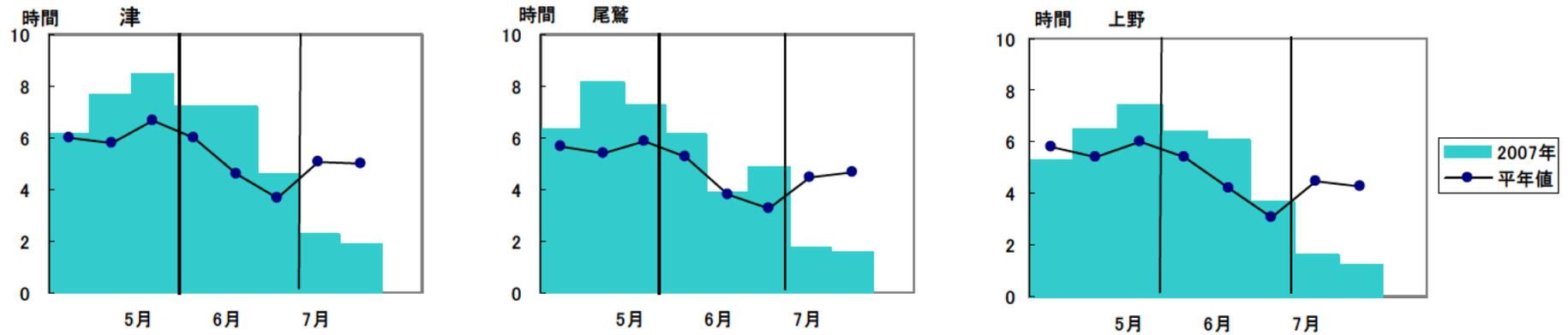
気温の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



降水量の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



日照時間の旬別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



7. おしらせ（前回と異なる項目にはNEWの印があります）

1) 利用方法

この病虫害発生予報は、定期的（4～8、10、3月各月の下旬）に発表されます。この予報の他、不定期に警報、注意報、特殊報、技術情報も発表されます。

これらの資料は全部または一部をコピーして再配布しても構いませんが、必ず「三重県病虫害防除所」の文字が入るようにしてください。

病虫害防除所ホームページには、これらの情報のほか、各種のグラフや写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

2) メール通知サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせするサービスを行っています。この通知を希望される方は、病虫害防除所ホームページの要領にしたがってお申し込みください。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/byotyumail.htm>

3) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。最新の農薬登録状況を確認するには、次のイン

ターネットサイトで調べるのが便利です（下記のアドレスに変更されています）。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>

4) NEW 三重県病虫害防除の手引き

「三重県病虫害防除の手引き」の最新の冊子版（平成19年3月12日現在）を病虫害防除所ホームページに掲載しています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/nouyaku/tebiki/20070312/070312tebik.htm>

5) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の利用の便宜を図るため「平成19年度病虫害発生予報利用の手引き」を作成しました。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/yoho/h19yohotebiki.pdf>